

Barikei

<https://imabari.keizai.biz>

TAKE FREE

Vol. 02

April 2026

不定期発行

|





LOCAL HERO

#今治を耕す人

給食の「向こう側」で子どもたちの未来を育む



農家
今村 伊都子さん
(今治市立花地区)



「川を汚さない給食」から始まった、命のバトン
今治市街に近い立花地区。かつて、給食センターの建設計画が持ち上がった際、排水による川の汚染を危惧した農家たちが立ち上がり、1970年代に「立花有機研究会」が設立された。今村さんの父もその一人でした。「子どもたちのために、安心安全なものを作りたい」。その一心で行われた行政への働きかけが実り、今治ではいち早く地産地消の有機野菜給食が実現したのです。

今治の学校給食には、全国に誇れる歴史があります。それは「自分たちが無農薬の野菜を作るから、自校式給食(学校での調理)を守ってほしい」と願った農家たちの情熱から始まりました。その志を受け継ぎ、40年以上にわたって土に触れ続ける今村伊都子さん。彼女の野菜作りは、単なる農業ではなく、子どもたちへの「祈り」そのものでした。

大きなニュースにはならない。

でも、私たちの街をちよつとずつ楽しく、豊かにしている。

今治には、

そんな営みが、いくつもあります。

誰かが選り、続けてきた時間。

その積み重ねを、そつと束ねました。

もくじ

特集 ローカルヒーロー

変わる今治、変わらない今治

今治を選んだ、私たちの理由

NEWSTANDARD

超超超ローカルニュース

Web & SNS

もっと深く、今治を知る

紙面で紹介しきれなかったインタビューや、撮り下ろしのフォトギャラリーはウェブサイトとSNSで公開中です。



公式ウェブサイト
imabari.keizai.bi
過去の全アーカイブを無料で公開しています。



Instagram
最新の取材風景や、記事公開の速報をリアルタイムでお届けします。



父の背中を見て育った今村さんは、保育士を経て30歳で農業の道へ。「食という字は『人を良くする』と書くでしょう。体を悪くするものを作っちゃいかん。その信念は、40年経った今も揺らぎません。」

土を観察し、虫と向き合う「手仕事」の日常

今村さんの朝は早く、1年を通して大根・ニンジン、かぼちゃなど

10種類以上の野菜を育てます。病害虫対策もすべて手作業。「寒

くても鼻水ふきながらでも、やらんといかん。かつては多くの仲間

がいた研究会も、現在はわずか4人。それでも今村さんは、朝7時に学校へ野菜を届ける当番を欠かしません。」

「ほんの一割、二割の違いで、安心で

おいしいものが食べられるなら、その価値はあると思うんやけどね」

そう語る今村さんの野菜は、手間暇がかかっているにもかかわらず、手に取りやすい価格で市場にも並びます。多くの人に、当たり前が良いものを食べてほしいという願いからです。

73歳の挑戦、そして次世代への「気づき」

今村さんの原動力は、常に「子どもたち」です。かつて自閉症の子ら

の自立を願い、パン工房を立ち上げた経験もある彼女。今も地元の小学生を畑に招き、授業を行っています。「子どもたちがあ、わかった！って気づく瞬間がある。それが何よりうれしいし、元気をもらえるんよ」

現在、73歳。新たに「黒ニンニク」の加工にも挑戦するなど、その意欲は衰えません。後継者不足という課題はありますが、孫娘が農業に興味を示していることが、今の小さな希望です。先人たちが築いた「有機の学校給食」という宝物を、絶やしたくない。今村さんの畑には、今日も子どもたちの健やかな成長を願う優しい風が吹いています。

2026年1月22日公開



全文は公式サイトで



101歳の「花の守り人」が道端に立てる、生かされた命の証



品部 政夫さん (今治市玉川町)

船の「二便前」に出港したのが、北方町沖で沈没し多くの犠牲者を出した「第十東平丸」でした。

「たった二便の違いで助かった。自分は生かされた」

その思いが、戦後の品部さんを突き動かしてきました。郵便局員として勤め上げた後、竹林整備や炭窯作り、ボランティア団体「市民の水を守る会」の立ち上げなど、休むことなく地域のために尽くしてきました。

てきた地区の花壇を手放すという苦渋の決断も経験しました。それでも、品部さんの歩みは止まりません。自宅近くの橋の上にある花壇には、今も手入れの行き届いた草花が並びます。その花壇の傍ら、品部さんの哲学を象徴する一枚の立て札があります。「明日枯れる花にも水をやる心」

2026年1月7日公開

2026年の正月。今治市玉川町の道端に、手作りの「謹賀新年」の札がぼつんと立っていました。持ち主は、この町に住む101歳の品部政夫さん。長年、地域の花壇整備や環境保護に心血を注いできた彼を、住民は敬愛を込めて「花の守り人」と呼びます。

「二便の差」が分けた運命と、故郷への想い

品部さんの活動の根底には、終戦直後の忘れられない記憶があります。20歳で入隊し、旧満州や濟州島で終戦を迎えた品部さん。1945年11月11日、復員船で故郷を目指しましたが、彼が乗った

「明日枯れる花にも、水をやる心」

近年、活動を取り巻く環境は厳しさを増しています。仲間の高齢化により、10年近く手入れを続け



全文は公式サイトで



「空白区間」がつながる日も いよいよ間近?

今治の交通の流れを大きく変える「今治小松自動車道」。長らく未開通のままだった「今治湯ノ浦IC」から「今治IC」までの区間に、新たに設けられる新インターチェンジの名称が、「今治朝倉IC」に正式決定しました。

現在、今治湯ノ浦IC～今治朝倉IC間は2026年度中の開通を目指し、着々と工事が進行中。今治ICまでの全線開通時期は未定ながら、市街地と松山自動車道が直結する「高規格道路ネットワーク」の完成に向け、着実に歩みを進めています。

2025年11月13日公開



全文は
公式サイトで



戦禍を耐え抜いた 「奇跡のレンガ壁」が解体

今治のタオル産業の礎を築いた「興業舎」。その1909年建設の工場外壁が、その役目を終え、解体されました。

1945年の空襲で市街地が焦土と化す中、唯一焼け残ったこの壁は、明治から続く繊維の町の誇りを伝えてきました。

解体に際し、市はデジタルアーカイブ化を決定。「実物は失われるが、データと記憶の中で歴史を語り継ぎたい」としています。

2025年8月6日公開



全文は
公式サイトで

変わらない今治

変わる今治



写真提供=所属事務所

ここで歌えて思い残すことはない。
これからも今治を盛り上げたい



さよならフジグラン今治。 レーモンド松屋さんが 贈った「最後の恩返し」

1月末で閉館を迎えた商業施設「フジグラン今治」。その27年の歴史のフィナーレを飾るように、1月10日、歌手・レーモンド松屋さんの歌声が吹き抜けのホールに響き渡りました。

かつてアマチュア時代、この場所でステージに立っていたレーモンドさん。「苦しい時代を支えてくれたこの場所に恩返しを」と、ノーギャラでのライブを申し出ました。

名曲『夜明けのブルース』を「ここはフジグラン 今治の店」と替え歌で披露。集まった大勢のファンや買い物客が手製のうちわを振り、2階まで埋め尽くされた会場は、かつてのにぎわいを彷彿とさせる熱気に包まれました。

形ある建物はなくなっても、ここで交わされた笑顔や感謝の言葉は、訪れた人々の心に深く刻まれました。

2026年1月13日公開



全文は
公式サイトで



日本一周の果てに、 穏やかな瀬戸内に癒されて



宮坂 大智さん / NPO法人ECOFF代表

移住の決め手

日台湾での島暮らしで感じていた海ゴミの問題。それを解決するには、山林の管理が欠かせない。そう気づいた時、山と田畑、そして古いけれど立派な家があるこの場所が『宝の山』に見えました。ここは、自然と共生する自立した暮らしを実践できる最高のフィールドです。

今治のここが好き

玉川エリアの『ちょうど良さ』。静かな里山でありながら、市街地まで車で15分。過度な干渉はないけれど、困った時にはそっと手を差し伸べてくれる。この絶妙な距離感が、長く住み続けるには重要なんです。



東京都出身。村おこしNPOを運営し、台湾での生活を経て、2024年に玉川町へ。友人の実家である築60年の古民家と、江戸時代から続く屋号を引き継ぎました。

2025年12月26日公開

全文は
公式サイトで



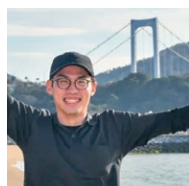
福岡 寿亮さん / 道の駅 マネージャー

全文は
公式サイトで



福岡県出身。自転車での日本一周中、しまなみ海道の穏やかな海に心打たれ、2020年に移住。現在は伯方島の道の駅で、訪れる旅人を迎える側に立っています。

2026年3月17日公開



50年後の未来を見据え、 里山のバトンを繋ぐ

移住の決め手

日本中を回りましたが、瀬戸内海の湖のような静かさは特別でした。かつて旅先で受けた恩を、今度は自分が旅人に返したい。そんな思いで、サイクリストの経験を活かせる今の仕事を選びました。

今治のここが好き

家族で夕日を眺める鴨池海岸公園での散歩。島で働き、陸地(市街地)で暮らす。病院や買い物などの利便性と、最高の景色が両立している今治は、子育て世代にとっても過不足のない街です。



全文は
公式サイトで

2025年
10月30日公開



『いつか』の夢を『今』に変えた、朝倉の星空



今治のここが好き

朝倉の自宅前の田んぼから見える満天の星空です。街の便利さと、すぐそばにある豊かな自然。不便なこともある古民家暮らしですが、自分たちの手で暮らしを耕す楽しさを実感しています。



移住の決め手

離れて暮らす不安もありましたが、最後は勢いでした(笑)。移住後、パートナーが淹れてくれた一杯のコーヒーに感動し、ずっと胸に秘めていた『誰もがほっとできる居場所を作りたい』という夢が動き出したんです。



横田 七海さん
古民家カフェ「菜」オーナー

高知県出身。養護助教諭として働いていた横田さんは、コロナ禍をきっかけに今治でリモートワークを始めたパートナーを追いかけて、2021年に移住しました。

今治を選んだ、 私たちの理由。

今治には、海があり、山があり、そして何より「商いの活気」と「人の温かさ」があります。都会の喧騒を離れ、この街に根を張ることを決めた3人に、その理由を聞きました。

超超ローカルニュース



今治のマスコットキャラ、バリイさん、ファン手作りの雨がっぱを初着用

今治の推し活、ここに極まれり! 巨体ゆえに雨天時はブルーシートが限界だったバリイさんに、ファン歴13年の「衣装職人」が3カ月かけ特製雨がっぱを新調。愛の詰まった勝負服(?)のおかげで、雨の日ものんびりPRが可能に。今治の平和はファン愛が守っている。

2025年11月5日公開

写真提供=今治城管理事務所



今治城を映したリフレクション写真、SNSで話題に

築城の名手もびっくり? 日本三大水城・今治城が、堀の水面に完璧に映り込む「奇跡の一枚」がSNSでバズり中。学芸員が「ふらっと」スマホで撮ったとは思えない鏡張りの絶景に、800超のいいねが殺到。海水魚も泳ぐ広大な堀が、この時ばかりは天然の巨大フォトスポット!

2025年1月23日公開



ハロウィン演出? 今治・イチジクの木に「リアルすぎる」マネキン、存在感放つ

今治市の畑に、鳥もビビる「リアルすぎるマネキン」が出現! 農家の白石さんが理容店から譲り受けた生首(?)に服を着せて吊るしたところ、その強烈な「目力」で鳥害が激減。図らずもハロウィンばりのホラー演出となり、近隣住民を震え上がらせたつも笑わせている。

2025年10月28日公開



月間最高PV

398,000 views

今治市民のみならず、市外・県外の「今治ファン」からも熱い視線を集めています。私たちはこれからも、30万回の「へえ〜!」「おもしろい!」を生み出すメディアであり続けます。

取材スポット数

市内全域

(陸地部から島しょ部まで)

年間記事配信数

約300本

数字で見る今治経済新聞

今治の「今」を届けて、おかげさまで多くの方に愛されるメディアに成長しました。

New Standard

今治に生まれた「新しい定番」。

伝統ある造船とタオルの街、今治。この街の歴史や自然に惚れ込んだプレイヤーたちが、新しい感性で「集いの場」を生み出しています。

地域交流拠点「くろごま団地」



全文は公式サイトで

2025年9月2日公開



こだわりすぎず、緩やかにつながる。ここでは、誰かの「やりたい」が形になる実験場です

埼玉で空き店舗再生の価値を体感し、縁あって今治へ。この建物のオーナーさんとの素敵な出会いが決め手でした。初期投資なしで店が開けるシェアキッチンや本棚オーナー制を通じて、挑戦する人に伴走したい。この場所をきっかけに、商店街全体のシャッターを一つずつ開けていくのが僕の野望です。

オーナー: 福地 立憲さん(埼玉県出身・デザイナー/元今治市地域おこし協力隊)

地域交流拠点「ミヤウラ商店」

移住者の店が「おしゃれすぎて入りにくい」と言われにくいように。日常に役立つコインランドリーをきっかけに、誰もが自然に混ざり合える場所を作りたい

地元の人から『大三島のどこのがいいの?』と聞かれることがあります。外の目線で地域の魅力を再発見し、地元へ伝えるのが移住者の役割。観光客も、地元の人、移住希望者も。旧薬局がそうだったように、ここが再び、みんなの思い思いの時間が流れる『開かれた場所』になれば嬉しいです。

店主: 大橋 健太郎(おおはしけんたろう)さん・美加さん夫妻(千葉県・山口県出身/元今治市地域おこし協力隊)



全文は公式サイトで

2025年10月17日公開

複合施設「ICHIE(イチエ)」



全文は公式サイトで

2025年3月14日公開

働きたくても預け先がない。そんな親たちの孤独をなくしたい。恥を捨てて先輩方に教を請いながら、試行錯誤で形にした『居心地のいい場所』です

スナックを経営する中で、夜に子どもを預けられず働くのを諦めるシングルマザーの姿を間近で見ました。私自身も4人の母。かつて外出すらままならなかった経験から、親が気軽に外に出て、自分のチャレンジを続けられる環境を作りたかったんです。ここでは、従業員もお客さまも、みんなで支え合える場所を目指しています。

オーナー: 寺岡 梢未さん(今治市出身/4児の母・実業家)

